

編集後記 ～70年の成績をまとめて～

埼玉県 高柳 一馬

昨年、種目別競技の前に流す動画を作成させていただいたこともあり、『今年はどうしましょう?』という連絡をしたのが1ヶ月程前のこと。『今年は70回記念大会やからな。何か欲しいな』との返答を聞き、後悔しました。70回記念。珠算先進国である大阪が70年という時をかけ築き上げてきた大会に、部外者の私に関わっていいのだろうか。思い入れも知識も遥かに及ばない私では、逆に失礼に当たるのではないかと、2分ほど悩み、ここは関わらせていただき、同時に勉強させていただこう、という思いでやらせていただくことにしました。

こんにちは。月間サンライズ編集部の高柳一馬です。今回、上記のような流れで、『全大阪オープン珠算選手権大会』に、部外者ながら、関わらせていただきました。

ここでは編集後記と題していますが、私の、私による、私のための全大阪の見所を書かせていただきます。なお、文中では全て敬称を省かせていただきます。時代が広範囲に渡るため、適した敬称が『選手』なのか『君』なのか『先生』なのか『殿』なのか、決めかねてしまうので、皆様が心の中でしっくりくる敬称を当てはめて読み進めていただければと思います。ご了承ください。

1945年。第二次世界大戦が日本の敗戦という結果で、終戦を迎えました。大阪大空襲により、大阪も焼け野原と化しましたが、そのわずか1年後、『第1回全大阪珠算選手権大会』は行われました。生活もままならない、食べる物にも困るような状況で、そろばんの競技会を行う…。大阪ならではの無茶苦茶さ・出鱈目さそろばんに対する意識の高さを表しているようです。

そして全大阪の特徴でもある正誤判定機の登場です。フルオープン化された51回大会で初めて見たときに『何て現代的なそろばんの大会だろう!』と驚いたのですが、何と初登場は14回大会。1960年のことです。『吾十有五にして学に志す』と孔子は言いましたが、全大阪は孔子よりも1年早く志していたのですね。当時の世間は高度経済成長期真っ只中。三種の神器(白黒テレビ・洗濯機・冷蔵庫)を家庭で必要としている中、そろばんの大会に正誤判定機を使うなんて…。無茶苦茶で出鱈目な時代の最先端を走る大会です。その当時から種目別競技も始まり、10分の1秒までの記録が残っています。

時代は流れ、大阪万博で世界が日本に、大阪に注目している頃。全大阪は中学生最優秀賞に続き小学生最優秀賞を設け、後進の育成にも力を入れ始めます。トップを競いつつ新世代の成長を促す。現在のチャレンジャーズステージの精神は、遥か半世紀前から続いているのです。

アントニオ猪木がモハメド・アリと日本武道館で『世紀の一戦』を繰り広げた2ヶ月後、大阪商工会議所では全大阪の30回大会が行われました。この30回大会を機に問題が改定され、現在と同一の問題程度となりました。孔子に倣ったのか、しっかり『三十にして立つ』こととなりました。以降40年、改定は行われていないにも関わらず、未だに日本で最高難度を誇り、攻略を目指す選手が後を絶たない問題であり続けています。当時の先生方の先見の明には驚きを隠せません。ただ、この改定、『30回大会の記

念に問題数も30題にしまおうか』『ええやん、ええやん』『ほなそうしよ』と、大阪人が生まれながらにして授かっている、ノリで決められた、という噂もあります。

日本中がバブル景気で浮かれている頃でも、全大阪は『四十にして惑』いません。変わらないという意味の惑わずではなく、惑わず進んで行くことができるようになったという意味です。大きな革新へ向かって、全大阪は惑わず進んで行きます。

さて、ここで成績に目を向けてみましょう。

個人総合競技の優勝者一覧を見ても分かる通り、数年に渡り何度も何度も繰り返し出てくる名前が目立ちます。ここで私は、ライバルの存在こそが記録更新の原動力だと感じました。…成績表を見れば誰でもわかる、当たり前のことですが…。雨池、寺田、西川、押谷、伍賀といった同年代(昭和20年代前半生まれ)の選手達が何度も優勝を争い、優勝を交代で獲得しています。種目別競技のタイムの更新も、ほとんど上記選手達が更新しています。ここまで珠算を極めてきた選手だからこそ、自信や負けん気の強さやプライドがあり、それらがぶつかり合うことで、化学反応的に技術・能力が引き上げられ、記録を更新していったのでしょうか。

この同年代の選手達が10年以上トップを走り続け、他の世代の選手の前に大きな壁として立ちはだかります。しかしここに、新進気鋭の若者が挑みます。そしてやがて、小林、藤川たち、昭和30年代前半生まれの世代が優勝を争うようになりました。こちらも記録を次々と塗り替え、10年近く他の世代を圧倒し続けます。

そしていよいよ、全大阪の顔とも言うべき人物が登場します。ご存知、金本和祐です。見た目で圧倒的な存在感を誇り、身も心もとてつもなく大きく、当時から日本トップレベルの大阪の中でトップを守り続けます。その間何と12年。初優勝後、一度も負けることなく、干支一回りを区切りに全大阪を引退します。しかしこの間もライバルが存在しなかったわけではありません。種目別競技の記録更新を見てみると、武江、古賀といったユニーク(?)で様々な伝説(?)を持った選手たちとしのぎを削っています。そして次世代を担うべき、大内、新名、山口といった現在も名前を耳にする機会が多いメンバーが台頭してきます。

優勝者や種目別競技の記録更新に焦点を絞ってみると、明らかに世代が偏っています。同世代のライバルの存在が、イノベーションを起こしているのです。そしてその前兆として、ライバル同士は確実に中学生優秀賞や小学生優秀賞に入り、最優秀賞を争ってきています。今大会でも、小学生優秀賞が今後の全大阪、ひいては珠算界を占う、1つの指標となる見所の1つだと感じます。

さて、話はまた歴史に戻ります。全大阪が半世紀の歴史を刻む頃、関西地方は自然の大いなる力に翻弄されます。阪神淡路大震災です。当時の地震災害では戦後最大の被害を出しました。街並みも様相を大きく変えましたが、全大阪も大きな革新を行います。『五十にして天命を知』った全大阪は、50回大会から、この選手育成に大きく寄与する全大阪を大阪だけに留めず、他府県の選手達にも門戸を開き始めました。50回はプレオープンというかたちで、他府県出場枠を設け、大阪一と他府県一を別々に決める形式で行われ、51回からは現在と同じ『全大阪オープン珠算選手権大会』となりました。

ここからが全大阪の第二の人生。今まで気ままな独身生

活を送っていたのが、結婚し、束縛される責任感に目覚めるように、少しずつ雰囲気を変えていきます。長い期間をかけ熟成させた雰囲気に、珠算界に精通した者にとってたまらない笑いのツボを加え、日本一を決めるにふさわしい重みをひと匙、さらに荘厳さを振りかけ、全国からの参加選手の『珠算先進国である大阪に対する敬意』を添えたら出来上がり。全大阪を他の大会にはない唯一無二の大会たらしめている雰囲気です。

遷暦を迎える頃には、全大阪は全国大会として確固たる地位を築くようになります。もともと大阪では歴史と伝統のある大会であったものが、全国的にも同じように評価されるようになりました。1都道府県の連盟が主催する大会としては異例の影響力を持った大会です。『歴史と伝統』という重苦しい感覚を抱きますが、そうでないのが全大阪。問題程度は変わらず、種目別競技も延々と続いています。『六十にして耳順ふ』の言葉通り、新しいものを取り入れる柔軟さも持ち合わせています。フラッシュ暗算や英語読上算が取り入れられたこともあります。運営に関しても100%回収・引き上げ採点だったものが交換採点を一部取り入れ、スクリーンを使った映像の利用も始めました。そんな節操のなき良いものは何でも取り入れる、という大阪人気質がここにも表れているのかもしれない。できない理由を探すのではなく『とりあえずやってみよか』とまづは動き出すことによって、発展を遂げてきたのでしょうか。

さて、再び成績に目を向けてみましょう。

フルオープン化した51回大会では、12連覇を一区切りで引退し、運営委員をしていた、金本が復活参戦し満点優勝。他府県からの参加者を返り討ちにしています。まさに全大阪の顔。畚の皮が厚い壁です。弱さの1つも見せないまま、全大阪の価値をさらに高め、以降は運営委員として大会に携わり続けています。…余談ですが、この51回大会に金本を参加させるために、当時の全大阪委員が金本の仕事を全て取り上げ肩代わりした、という噂があります。それでも成績処理プログラム等、事前にできる準備には携わったようですが、もし今、金本の全ての仕事を他の委員が取り上げ肩代わりしたら、全大阪に復活参戦する日が、もしかしたら…。

オープン化直後は群雄割拠の戦国時代の様相を呈します。全国から全大阪の難度を経験・攻略しようと、全国区の選手が続々と参戦します。迎え撃つ大阪の代表は新名。全大阪では一日の長があるのか、種目別競技で全国の猛者を相手に横綱相撲で存在感を見せつけます。

そして近年の全大阪、いや、珠算を語る上で外すことのできない人物が参戦します。宮城県のはやしそろばん総合教室、土屋宏明です。中学生名人として名を馳せる土屋が全大阪の歴史も塗り替え始めます。そこに立ちほだかるのもまた、大阪代表新名哲也です。土屋・新名の名勝負は語り尽くせぬほどあり、テレビに特集されたことも数え切れないほどです。しかし土屋がベテラン選手と呼ばれ始めた60回大会の頃からは、土屋一強の様相を呈し始めます。堀内(現在は竹澤)祥加が伝票暗算で記録を更新するまで、土屋以外の選手が記録更新することはありませんでした。その間10年。自身の記録を自身で更新し続けてきました。圧倒的という表現を通り越し、絶対的とでも表現すべき記録です。先日行われた全日本珠算選手権大会でも、たった一人の満点で日本一を獲得しています。満点を取れる実力の選手が何十人もいる中で、ただ一人満点を取った、取り切った…。やはり何か違います。そんな土屋の一挙手一

投足に、嫌でも注目が集まります(とプレッシャーでもかけておきましょう)。外せない見所です。

団体戦でも全大阪の特徴があります。団体構成の自由度の高さです。どんなメンバーでも自由に構成できるので、それが面白味を引き出します。教室単位はもちろん、学校単位、県単位、中には仲良し同士の団体もあります。はやしそろばんが複数団体を組みワンツーフイニッシュを狙ったこともあれば、はやしそろばんに対抗するため早稲田三人娘がチームを組んだこともあります。思えば、早稲田三人娘がスポットを浴びたのも、この全大阪があったからこそではないでしょうか。

様々な時期がありましたが、近年の大会では千葉県の子いさんぎのうの動向が注目を集めています。学校団体にも生徒を輩出するなどメンバーが揃わないことがありましたが、今回は現時点のベストメンバーを組んでいます。ただ、満点を狙えるメンバーが複数人いることで、代表メンバーを誰にするかの(贅沢すぎる)悩みも生まれます。けいさんぎのうに限らず、各指導者がどのような思惑で何を狙って団体を編成しているのかに思いを巡らせるのも一興です。種目別競技進出者の発表の際に点数の予想ができるため、発表に耳を傾けてみてはいかがでしょうか。

長くなりましたので、まとめてみます。

- ① 小中学生優秀賞争い
- ② 土屋宏明の一挙手一投足
- ③ 団体優勝争い(種目別競技準決勝進出者発表)

以上が私の、私による、私のための全大阪の見所です。

今回、成績のまとめをさせていただき、自分の勉強不足や知識の足りなさを実感しました。自分の珠算経験は、まだまだ浅い。知らない一流選手がこんなにいる。しかし、知らないことを知ることは楽しいことです。そして、知らないことを知ったことによって得られるものは多くあります。不可能だと思っていたことを実践している先人の存在、目標を設定する地点、上達への過程などが、その場の感覚や思いつきではなく、データをベースとして形成することができるようになりました(と思っています)。

全大阪は今回で70回。『七十にして心の欲する所に従ひて矩(のり)を踰えず(こえず)』。全大阪は、ついにその境地に達しました。『自分の心に思う事をそのまま行なっても、道徳の規範から外れることはない』という境地。私は今後もさらに発展していくに違いない全大阪のファン、そして攻略を目指す指導者であり続けたいと思います。

余談ではありますが、私の母・高柳知恵子(旧姓井上)は、大阪出身です。実家は寝屋川市にあり、母もこの全大阪に参加していました。文中にも成績にも何度も出てくる雨池健三と同門です。その母に全大阪について尋ねると『藤川くんたちの時代もあつたよね』との言葉。『藤川くんって、失礼な。誰に向かってくん付けしてんだ』と注意すると『だって同級生だもん。高校の時同じクラスで友達だったんだもん』と。まるで『わしゃ戦時中に零戦でB29を撃墜したんじゃよ』と言われたような感覚です。歴史の生き証人が身内にいるということで、部外者が勝手な解釈をし続けたこの文章も、ご容赦いただければ幸いです。

最後になりましたが、70年の長きに渡り全大阪を継続してきてくださった全大阪委員をはじめとする大阪珠算協会の皆様への敬意と、参加させていただけることへの感謝で、この編集後記の結びとさせていただきます。

ありがとうございました。